

津川 武一（つがわ・たけいち）

1、プロフィール

小説家、評論家、政治家、医師。さまざまなジャンルに多才ぶりを発揮。同志で究明した『太宰治文学批評集』があって津川武一は太宰治の批判者として終始する。

<生没>

1910(明治 43)年8月2日 ~ 1988(昭和 63)年9月4日

<代表作>

『農婦』『骨肉の姦』『生けるしるし』『出稼ぎ』『苦悶の文学』『葛西善蔵その文学と風土』

<青森との関わり>

浪岡村(現浪岡町)生まれ。医師、政治家として郷土と密着した活動を行う。作品は郷土を素材としたものが多い。

2、作家解説

旧制弘前高校、東京大学で太宰治とは同期であるが、深い交友はなかった。ただ、太宰が左翼活動をしていた頃一時的に同志として面識をもつにいたる。

旧制弘前高校時代、同期の上田重彦(石上玄一郎)が校友会雑誌に発表した「サガレン追憶」に強い感動を受け、その後の教養形成に変化をもたらされる。東大医学部(精神医学専攻)卒業、医局に勤める。石上玄一郎の『精神病学教室』に関わる題材提供のことなどで誤解を受け医局を去ることになる。

戦後、弘前に健生病院を設立、農民や庶民に医療活動を献身的に続けるかわら、弘前文学会を起こし、「弘前文学」を創刊し文学活動に入る。主な作品に『農婦』(読売新聞小説賞入選・昭和 28 年)『骨肉の姦』『生けるしるし』『出稼ぎ』『苦悶の文学』『葛西善蔵その文学と風土』『石坂洋次郎の文学その光と影』等がある。

また、「弘前文学」等に長短 25 編の小説を精力的に発表している。その他、『ひろった命』『酒、さけ』『国会が深夜になった時』『死にとりつかれた川端文学』等がある。

3、資料紹介

○『葛西善蔵その文学と風土』

図書

1971(昭和 46)年2月 20 日

198mm×135mm

「葛西善蔵の文学と私」「葛西善蔵の文学を追究する」「文学碑の建設をめぐって」「葛西善蔵の跡を訪ねて」「医学と文学」から構成される。作者が葛西善蔵と取り組んで 20 年、その成果をまとめたもので、地元の研究家ならではの貴重な一冊である。